

始



8
222

多
飛
代

い
な
は
と

栗
羽
の
巻

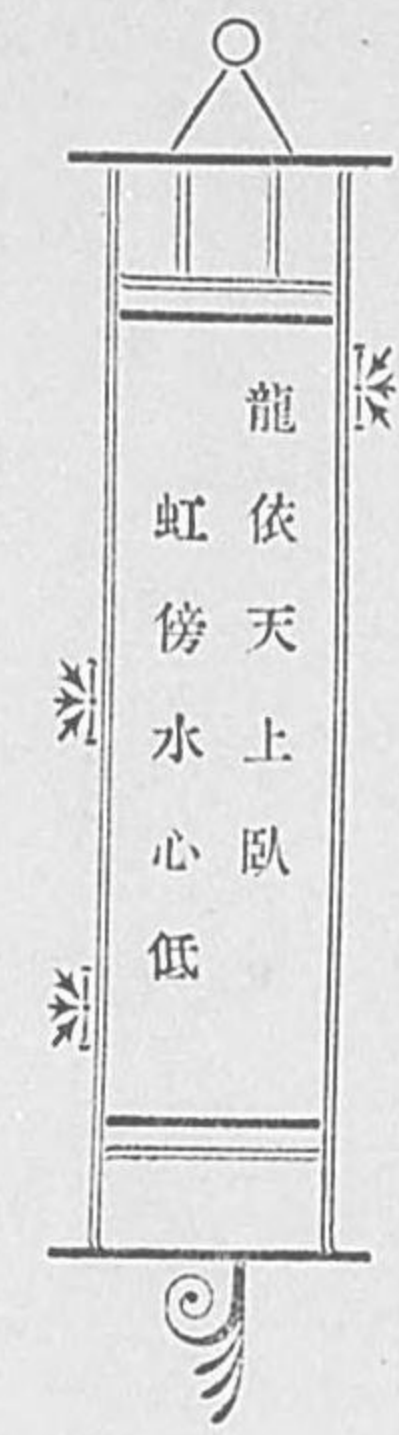
盛岡明治橋

南部氏の城下
と稱へし昔は
去りて岩手縣廳を置かる、今の
盛岡市の繁榮は更にもい
はじ浮梁を渡
し、北上川に
大橋を架け明治と名づけしは聖
代の記念を億萬年に傳へ
んよの意ふ
り出たるなる
べし



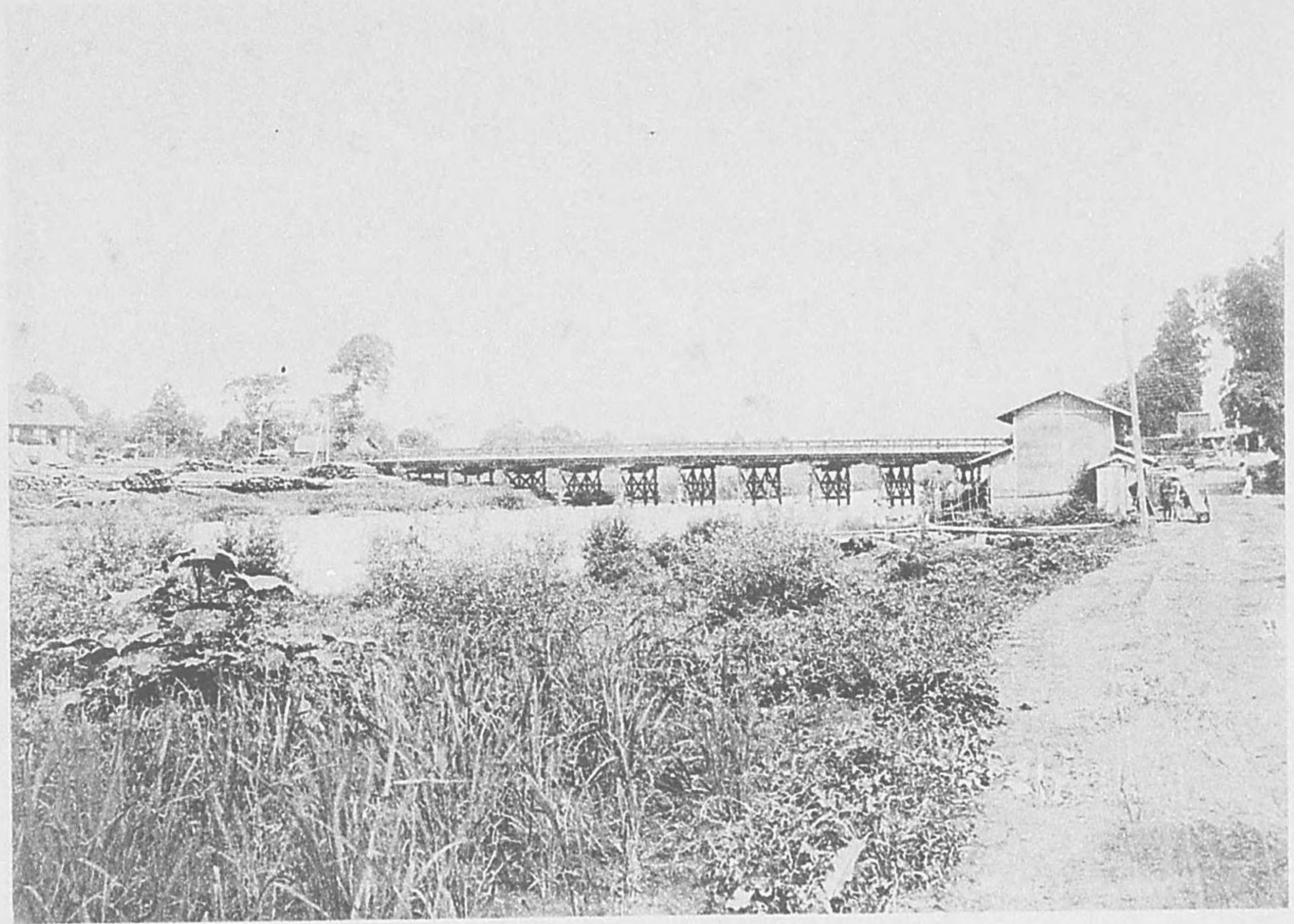
盛岡中橋

明治橋の弟なる此中橋のけしきも亦賞するに堪へたり
金人李俊民が



と賦せしもかゝる様をいへ
るならん

日は入て
消えぬ虹あり
川の秋



末の松山波打峠

君をおきてあだし

心を我がもたげ

すゑの松やま

なみも越ゑなん



契りきな互に

袖を絞りつゝ

末のまつ山

なみこさじとは



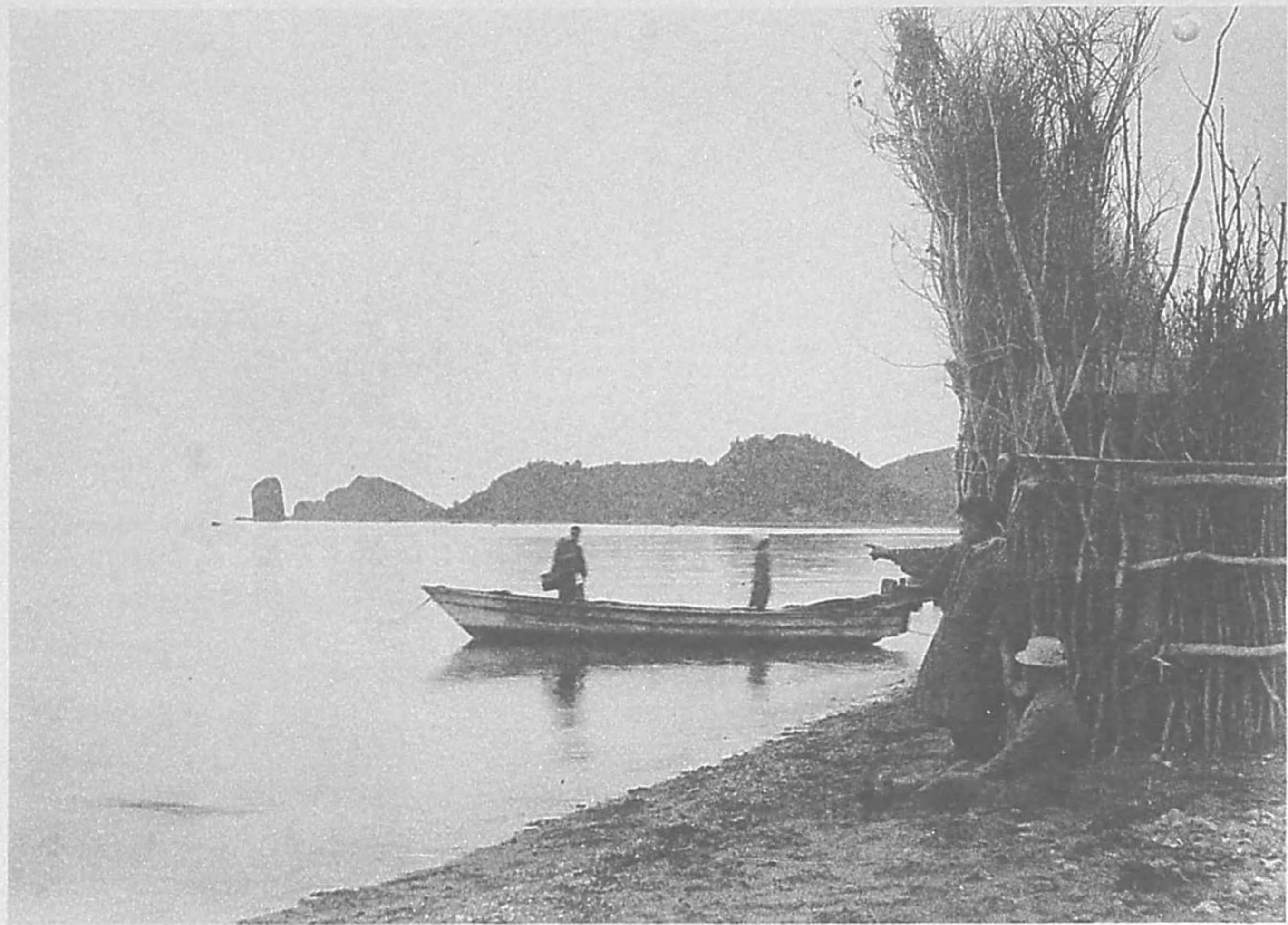
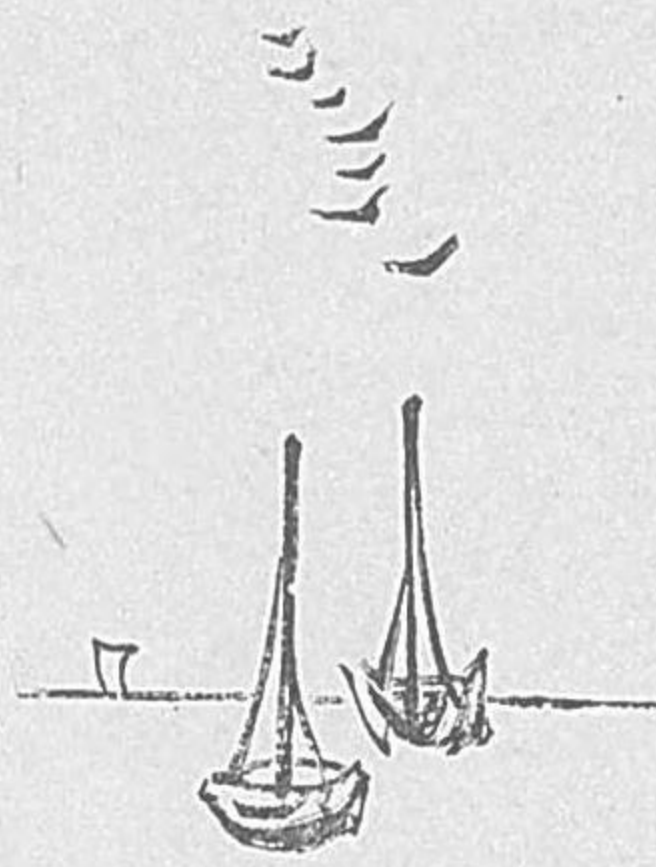
浅虫海岸 其一

浅虫は陸羽鐵道線秋田街
道に沿ひたる一の停車場
にて陸奥の南津輕郡中に
在り其往來の便よきと其
地に温泉あるをもて遊覽
の人多く集ひて小繁華を
なすに至れり海岸の風光
は今更言ふも贅ならん

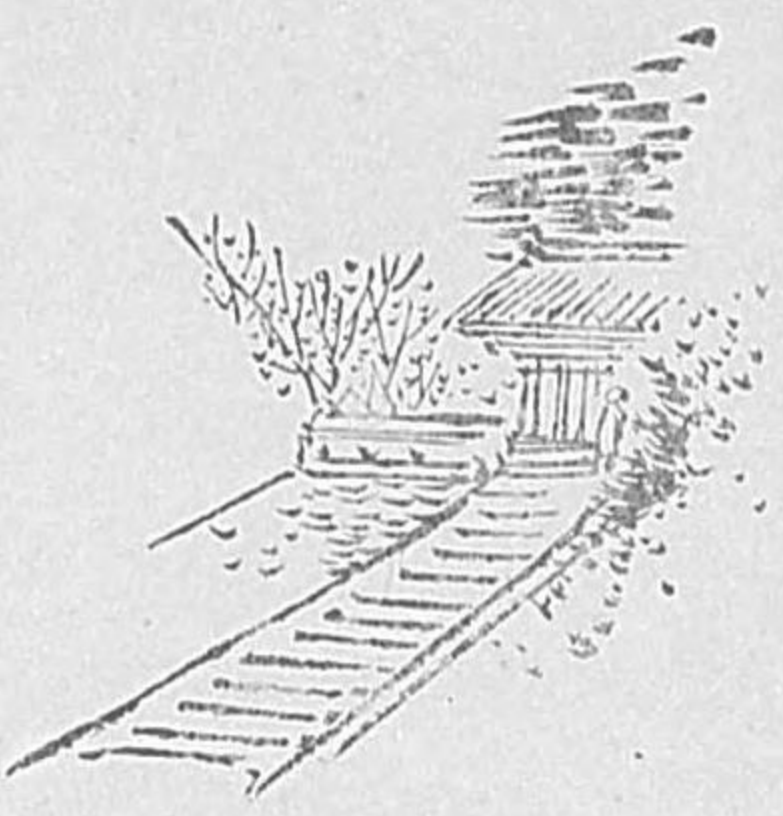


浅虫海岸 其二

圓光大師東國に巡錫して
此地に來りし時一頭の牝
鹿温泉中に浴せるを見て
其効驗あるを知り郷民に
諭して浴場を開きしと言
ひ傳ふ又麻を温泉に浸し
て蒸しけるより麻蒸名
つけしをいつか浅虫の文
字に書き改めけるとかや



青森市中



青森縣廳の所在地にて

海灣は陸奥第一の良港

たり北は渡島の箱館と

一葦水を隔つるを以て

北海道渡航の要津に當

り殊に東京より鐵路全

通したれば旅客の來往

貨物の集散頻繁にて年

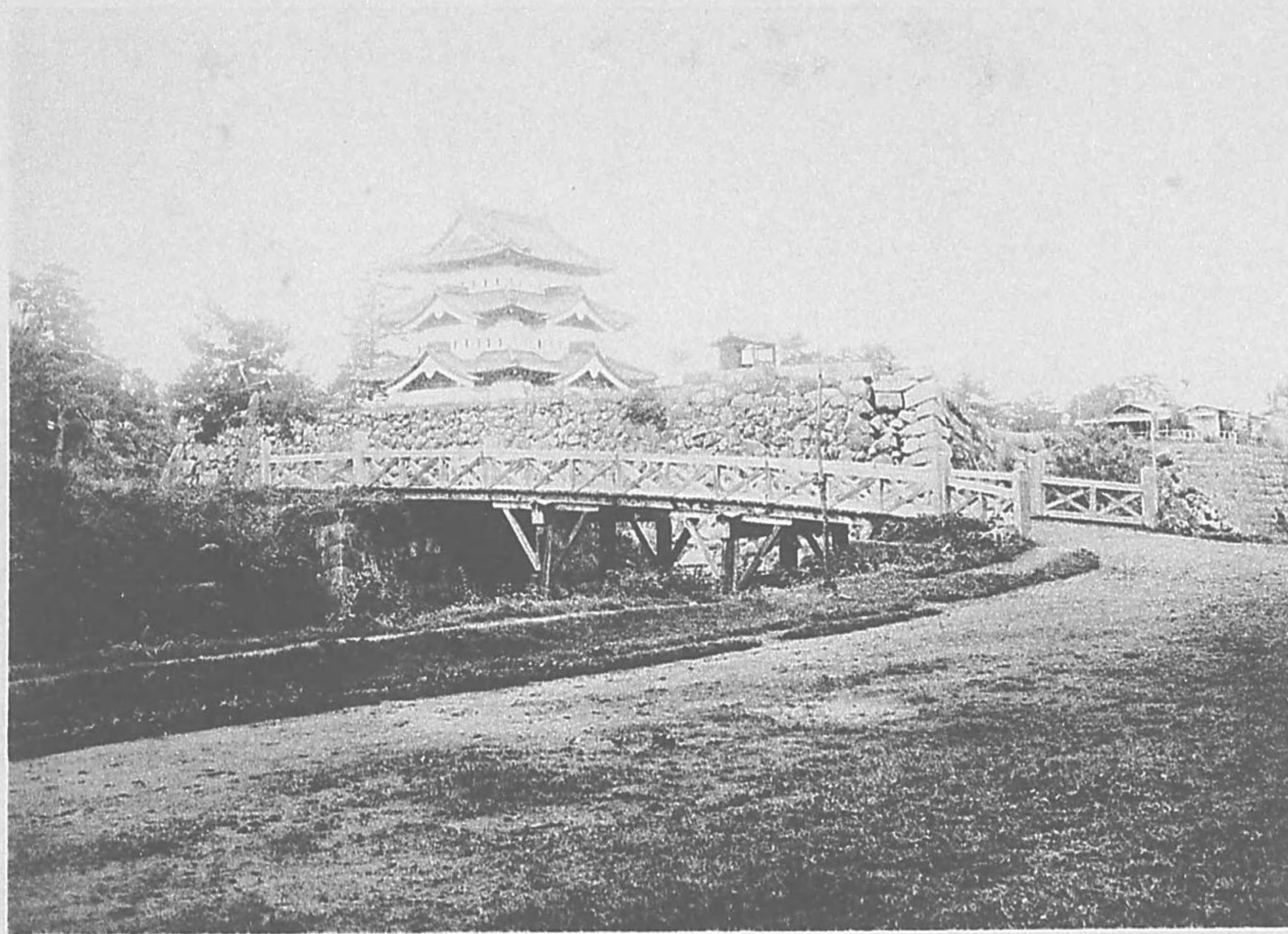
々賑ひを加ふる様なり



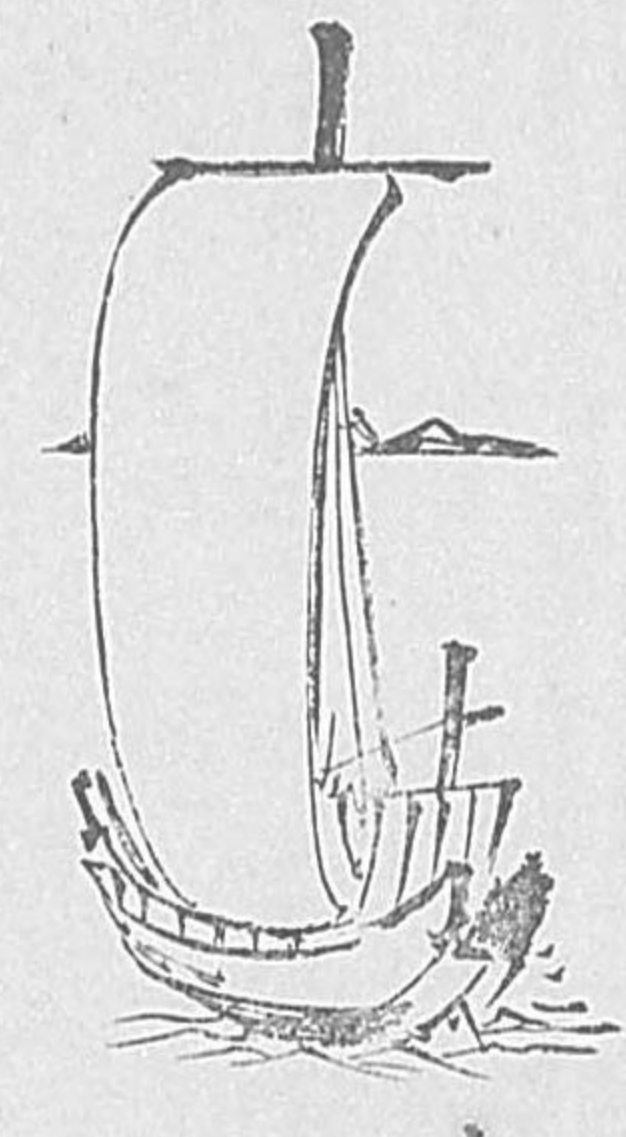
弘前城



弘前市の中央丘阜をなし
喬木鬱蔥たる處に城樓巍
然と立てり慶長十五年津
輕信牧の築く所にて津輕
氏累代の治所なりしが明
治四年藩藉奉還の後陸軍
省の所轄に屬せり



最上川帆船



雲氣濃如墨
江波綠似彩

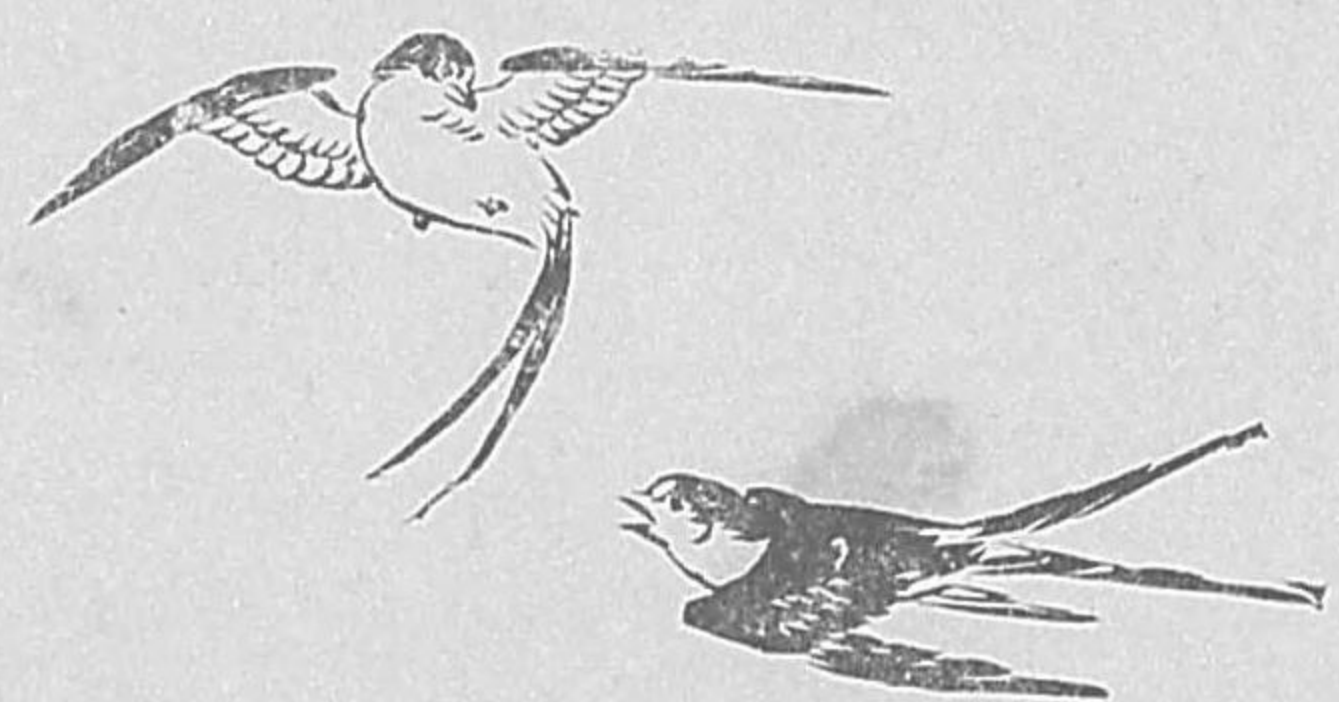
濛々吹細雨
杳々送征帆

最上川上れば
下るいな舟の

いなには非ず
この月ばかり

酒田日和山公園

南は近く最上
川に臨み北は
遙かに鳥海山
に對し風景明
媚なり西の一
道を隔て、松
林の中に日枝
の神社あり



蝶鳥も



遊び飽たか



日和山



象潟那曾瀧

稻村嶽の瀑布の下

流上之郷村に至り

て落するを那曾の

瀧といふ瀑上に小

橋を架す白橋是なり

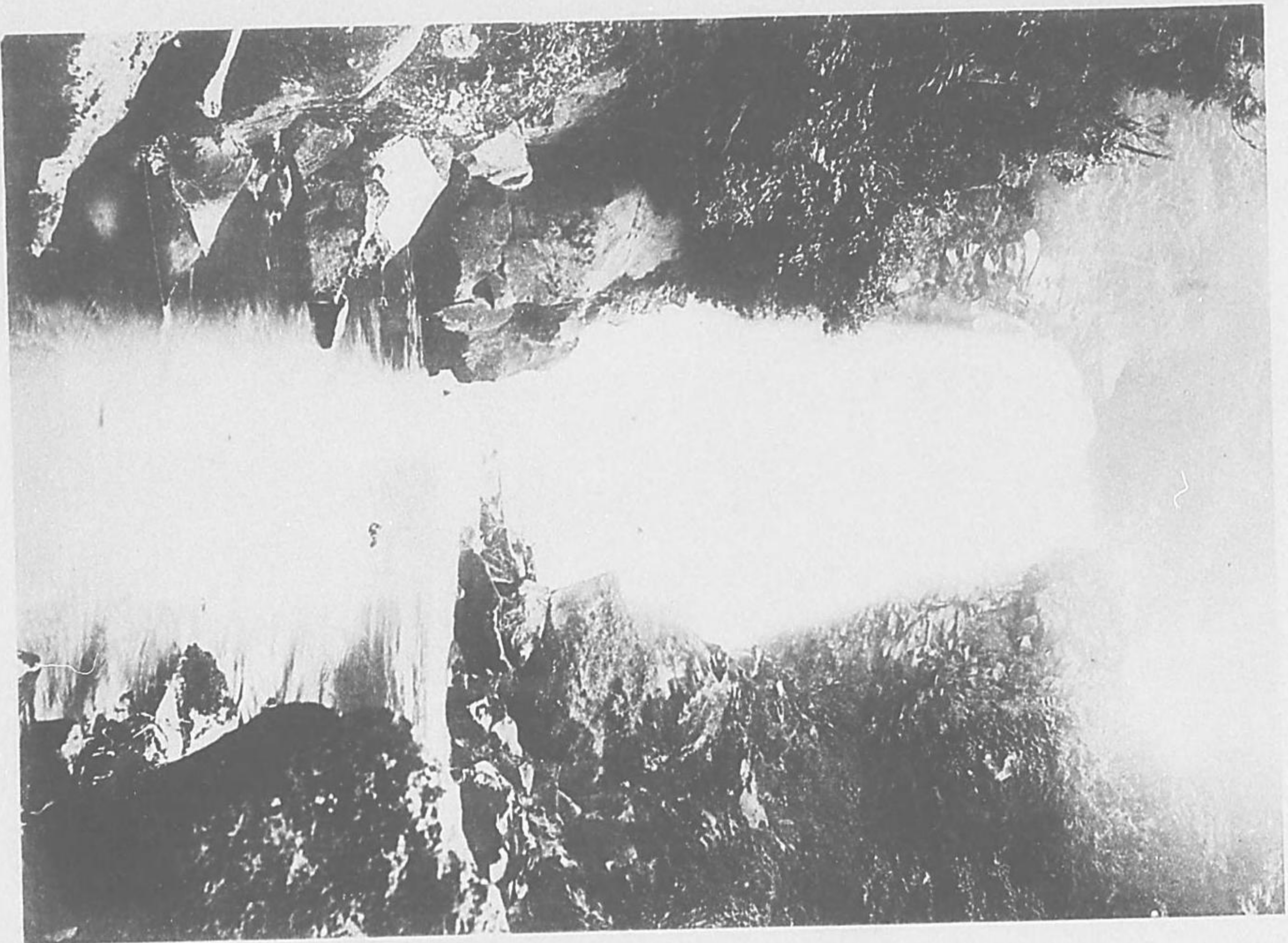
夫木集に

出羽なる那曾の

白橋なれてしも

人をあやなく

戀ひ渡るかな



象潟古蹟

昔象潟の女奥州松島

の人に嫁せり

ある月夜に其夫

其所の風景を

誇りしかば女



松島や雄島の月も

何ならずたゞ象潟の

秋の夕ぐれ

と詠みしと言ひ傳ふる美景

も文化の地震に埋没せしは

實に惜しむべし



象潟甘満寺

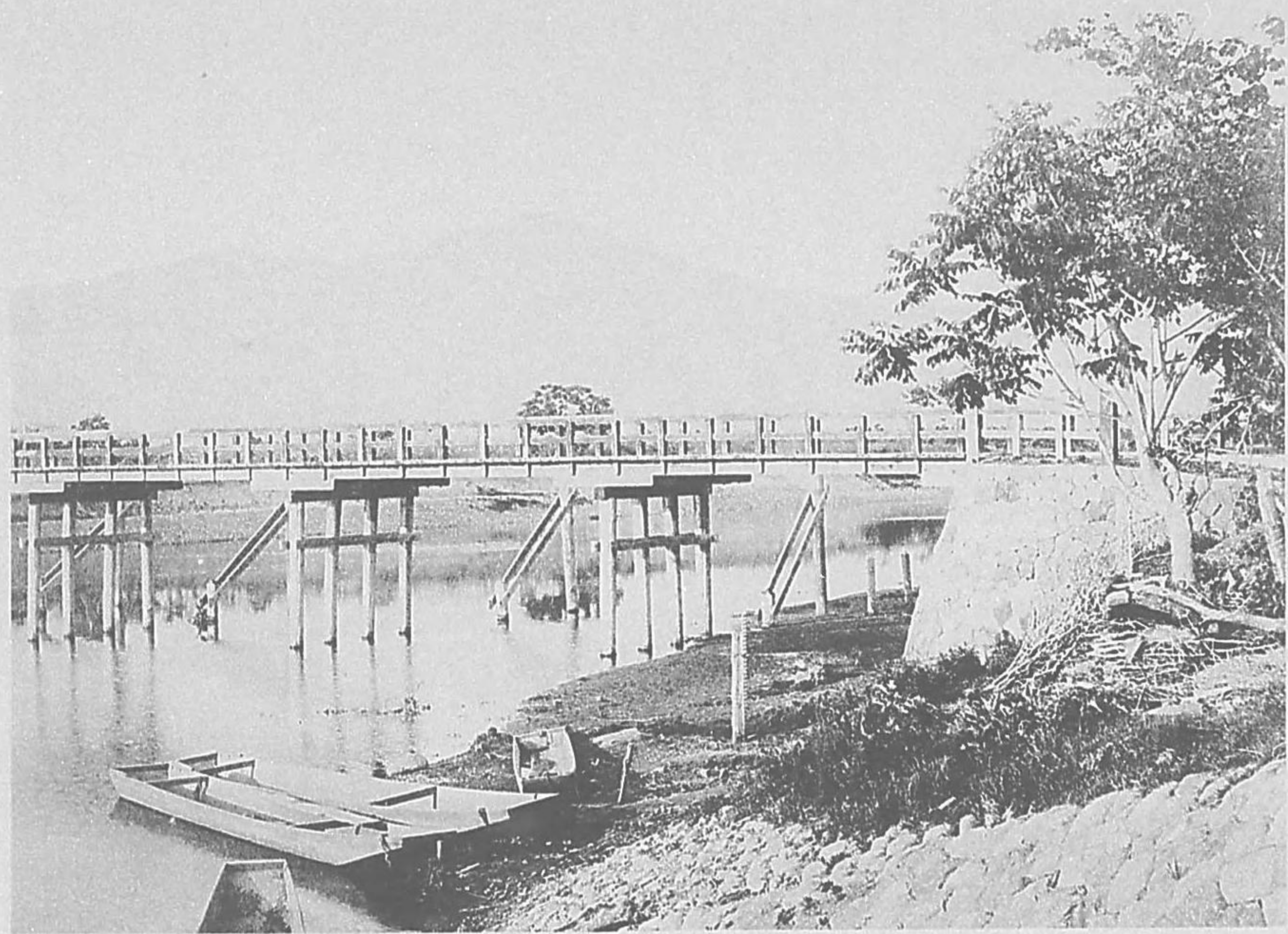
象潟や雨に

西施か合歡の花



と芭蕉が口號みし頃は松
島に伯仲せる佳景にて淡
粧濃抹兩宜なりしならん
を今は面影も無し昔の名
残はたゞ此禪刹あるのみ





日向川より鳥海山

鳥海山高

北海頭

海雲山樹

望悠々

不知何日

大鵬翼

化作名山

鎮羽州

長赤水作



羽後海岸

岸のべの

草食ふ馬の

たて髪に

心地ふげなる

沙風ぞ吹く



春風や草に

止まれる馬の脚



男鹿龍巻岩



紀氏六帖に

岩のうへを

すみかに

したる

あしたづは

世を長閑にも

思ふべきかな

伊勢



門前姥島の怒濤

一 痕 初 見

海 門 生

頃 刻 長 驅

作 怒 聲

萬 馬 突 圍

天 鼓 碎

六 龍 翻 背

雲 山 傾

元 人 仇 遠 句





門前奇石

めづらしき

石を集めた

門前は



なか

かた

戸ざし

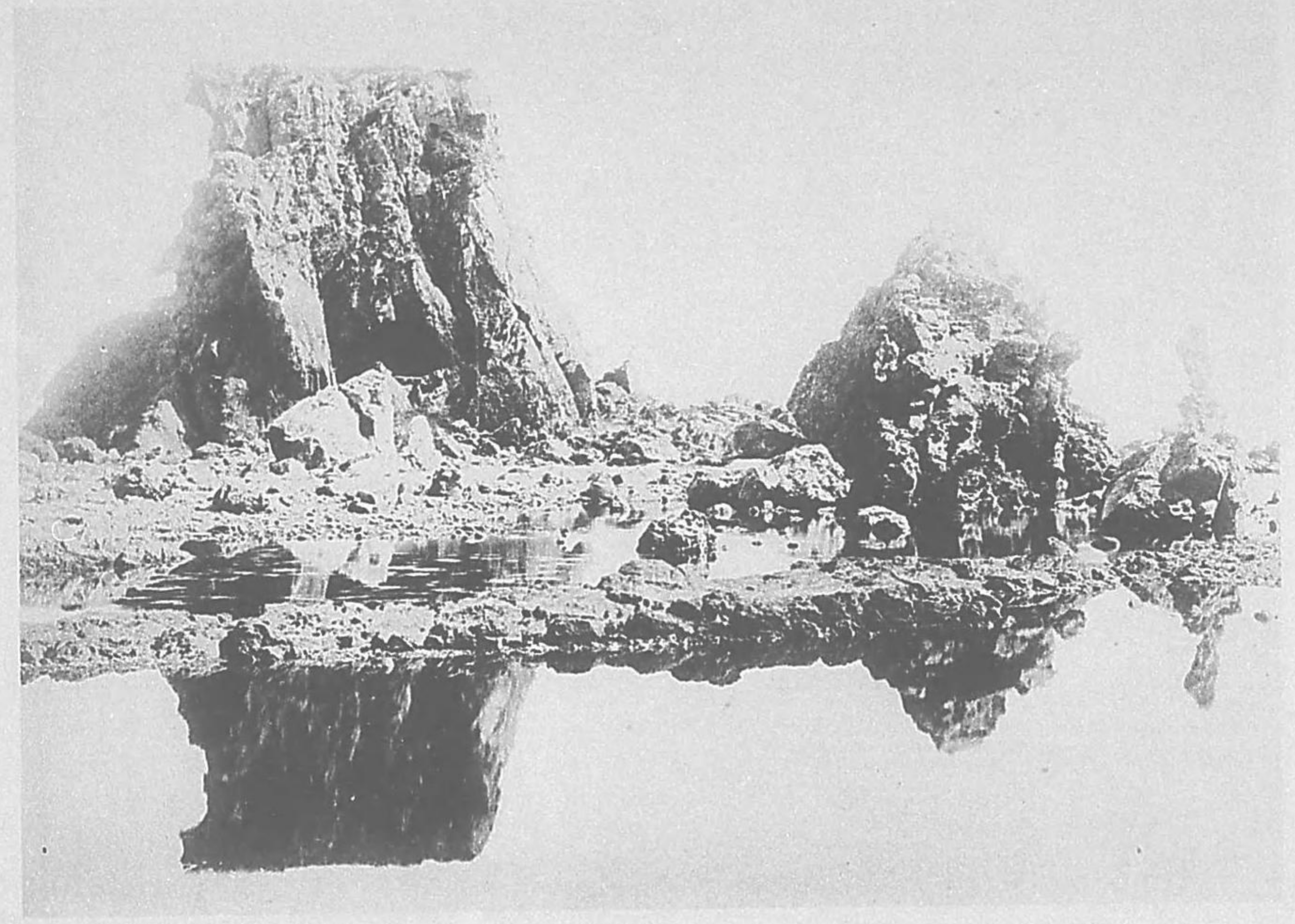
なりけり

石部金吉



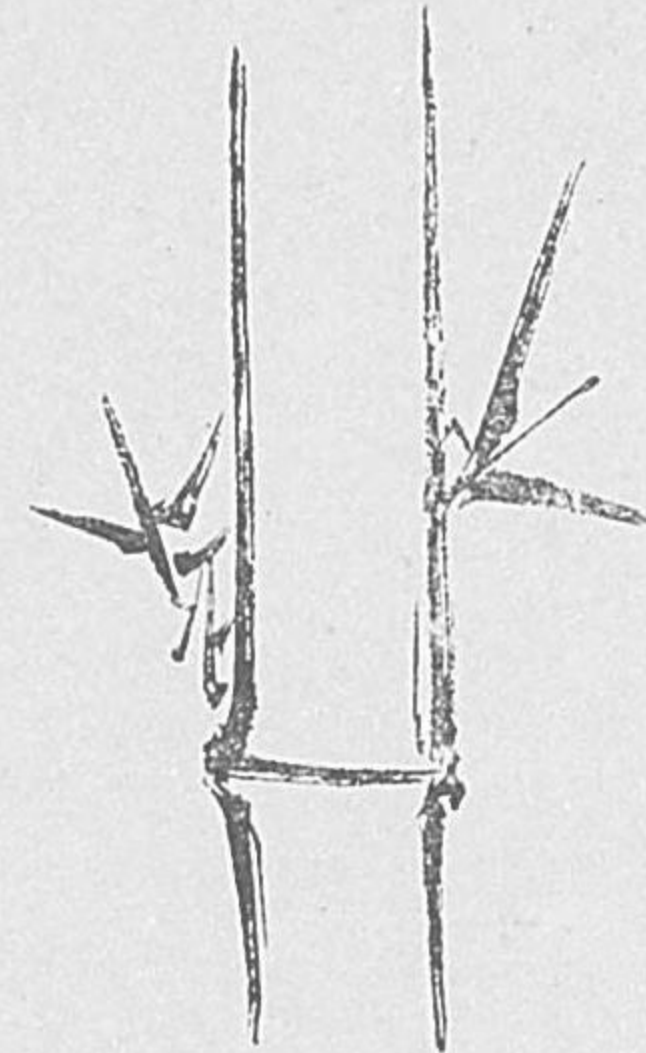
門前帆掛岩

いかなる狂
風暴雨にも
恐れ無く突
立つたる力
のほゞ驚く
べし戸隠の
神ならでは
此船をやる
ここかたか
らん
木枯を事も
なげなり
帆掛岩



吹浦羅漢岩

伽葉目蓮舍利弗阿
難をはじめて其他
の羅漢達が歡喜信
受の休見はたる此
岩の奇態不思議な
仰ぎて

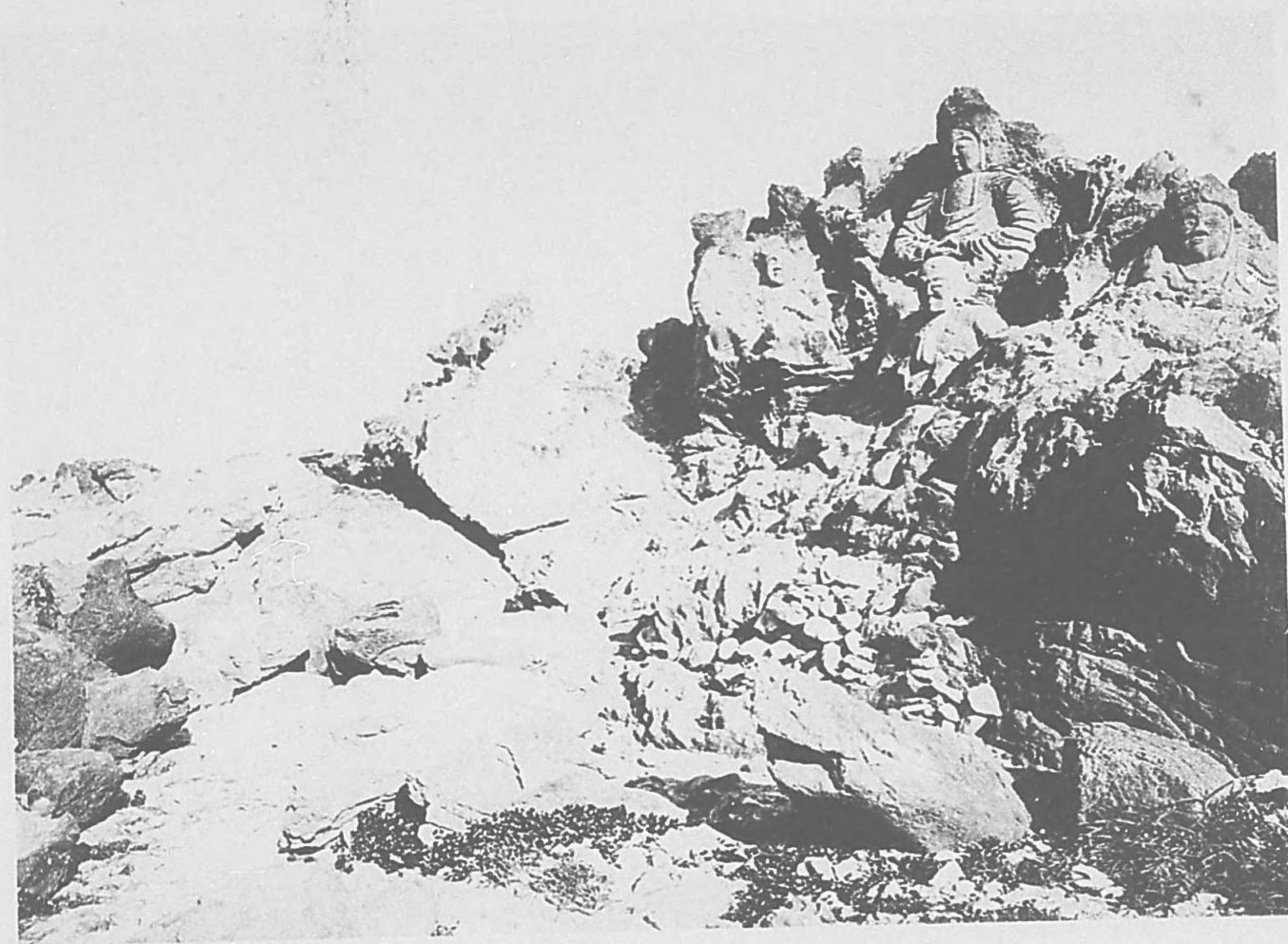


いつまでも朽ちぬ

岩ほをためしにて

釋迦の教の

風は吹浦



八郎潟 其一

八龍湖一名を孛湖と
稱し俗に八郎潟と云
ふ羽後南秋田郡にあ
り風景近江の琵琶湖
に譲らず沿岸鹿渡驛
の美倉が鼻と稱ふる
處は東北御巡幸の
際聖駕を駐め風景
を賞し給ひし地なる
を以て碑を立て其事
を刻せり



八郎潟 其二

湖面春深 煖氣勻
青蘆未隕 已知春

沙灣散駐 張魚客
蘆室時驚 射雁人

范 桴



まっ風のさそへば

波も音たて、

しらべをあはす

琴の水うみ

賣 花



米代川帆船

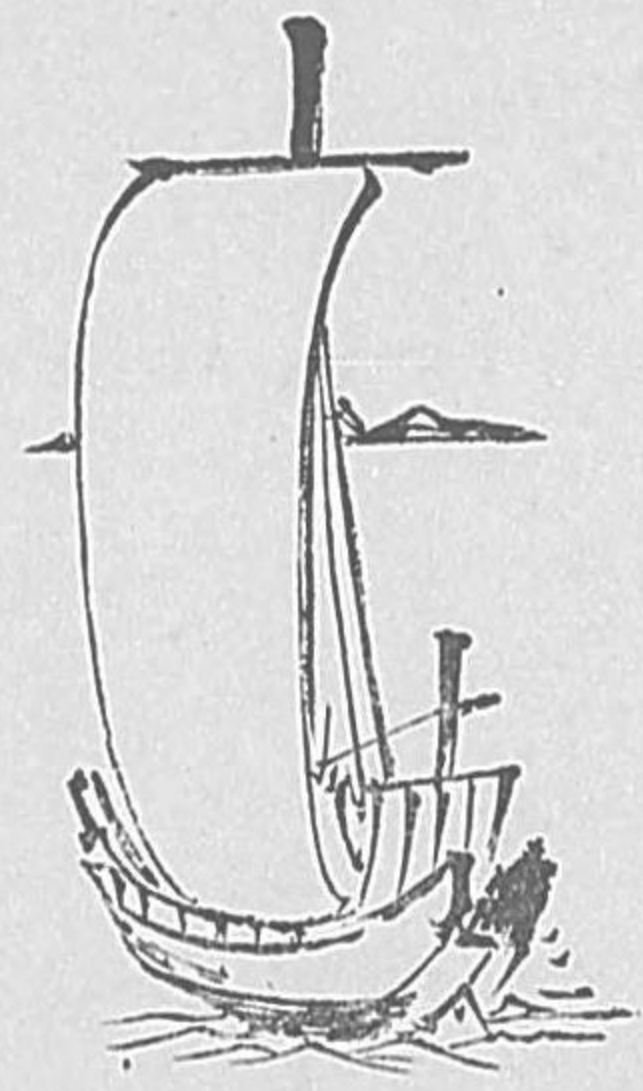
帆手うちて

樂しかりけり

ふきかぜの

こゝろ任せに

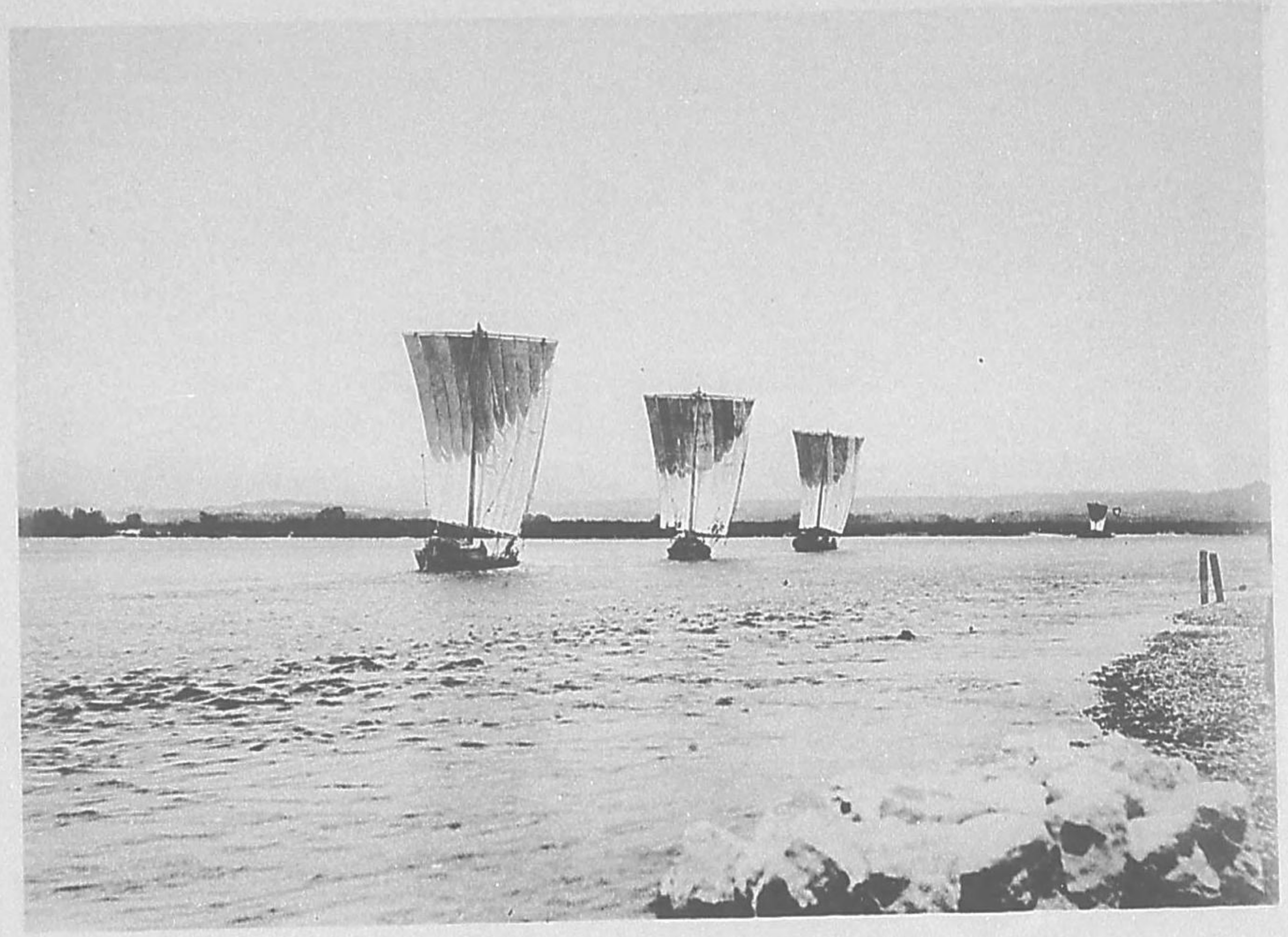
すゝむ川舟



ぬるみ行く

川や急がぬ

帆掛ふね



米澤附近
栗子峠 其一

米澤市より刈安を
經て岩代の信夫郡
に入る途中栗子峠
に近年墜道を穿ち
往來の便に供した
れどなほ凸凹多く
冬季積雪の候には
通行を絶つことあ
り



米澤附近
栗子峠 其二

千山雪勢正沒々
起趁冥搜急跨鞍

詞賦前人留不少

乾坤清氣得未難

寒水在壑爲胸次

老樹成花是筆端

我更臨風懷小阮

玉堂授簡有餘歡

馮浩咏雪詩



米澤附近

栗子峠 其三

山のかひそこ

とも見ぬす一昨日も

きのふも今日も

雪のふれ、ば

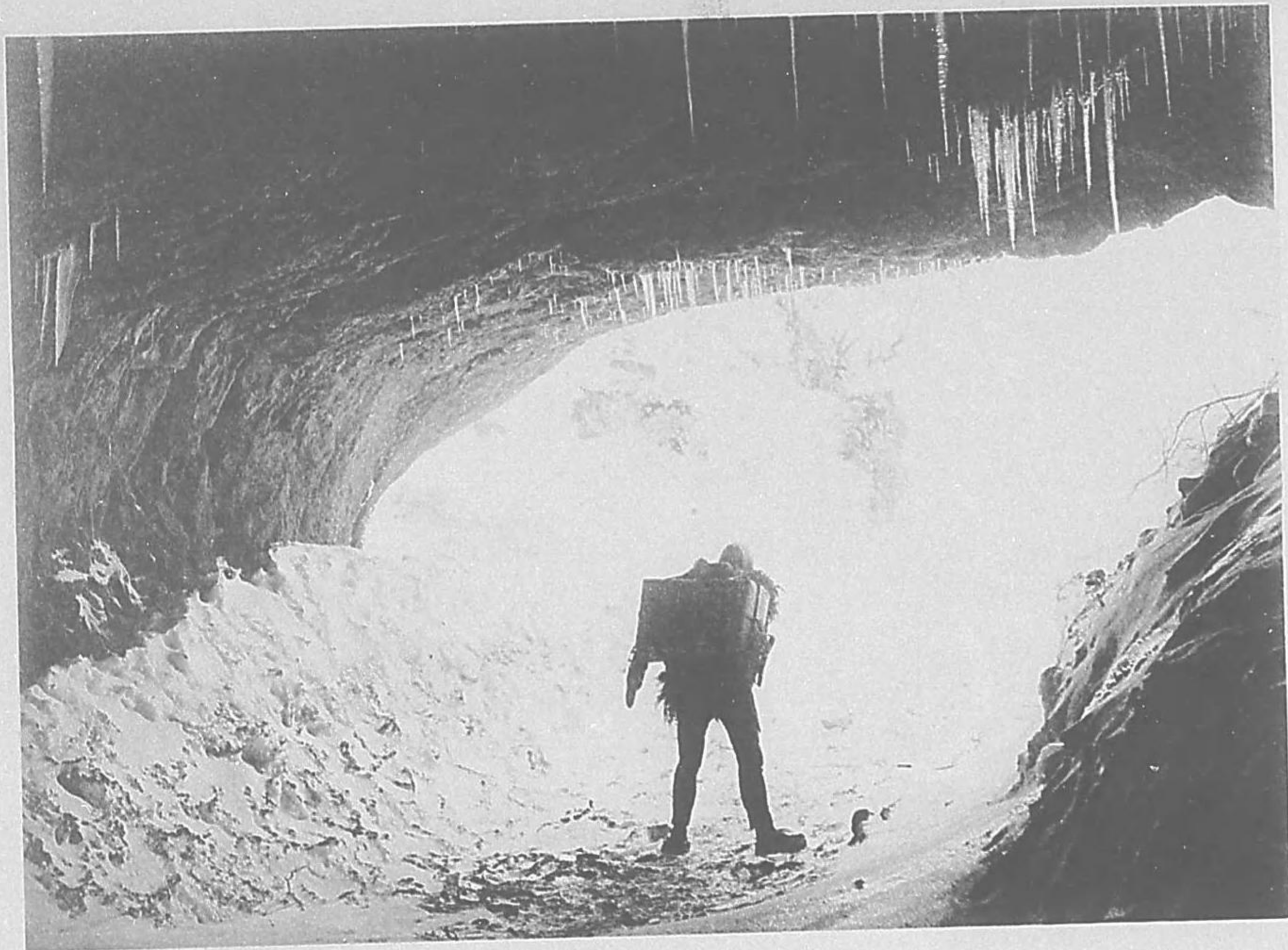


思ひやれゆきも

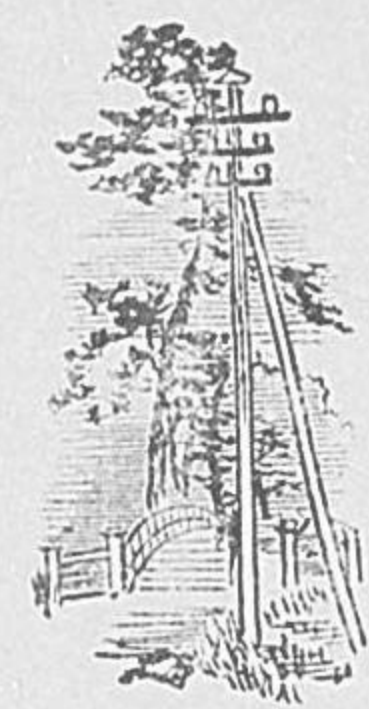
山路も深くして

跡たぬにける

人の 栖家を



米澤町



昔日上杉侯の城市たりし米澤は繁華山形に亞きて賑しく其附近の地には名勝多く遊覽に宜し此所は古來養蠶に名高く現今機業いよ盛にて米澤織の名天下にかくれ無し



米澤附近割出川

みなれ榎馴れて

世わたる舟人も

行く瀬に迷ふ

今朝の川霧

さよめるげにさる事

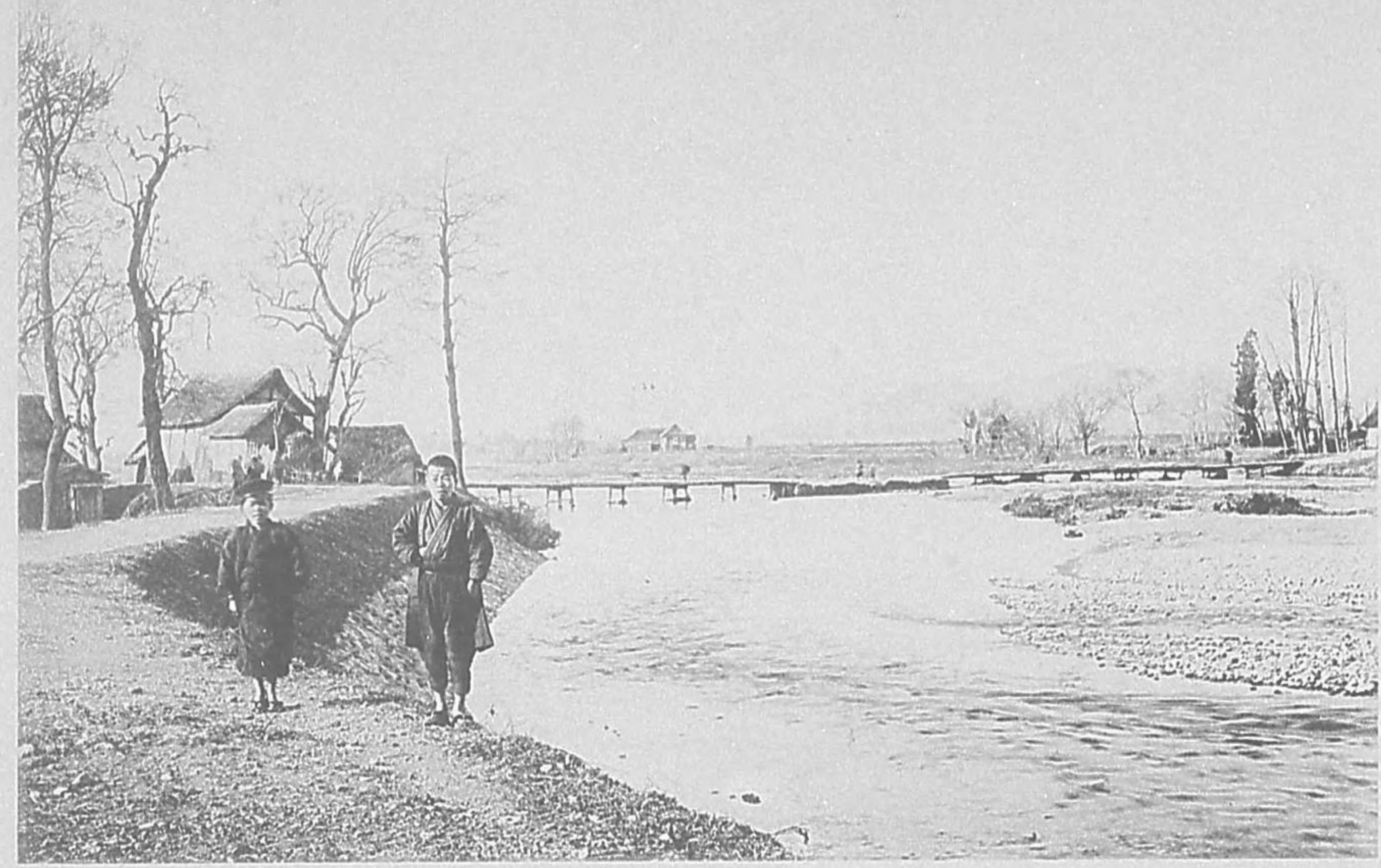
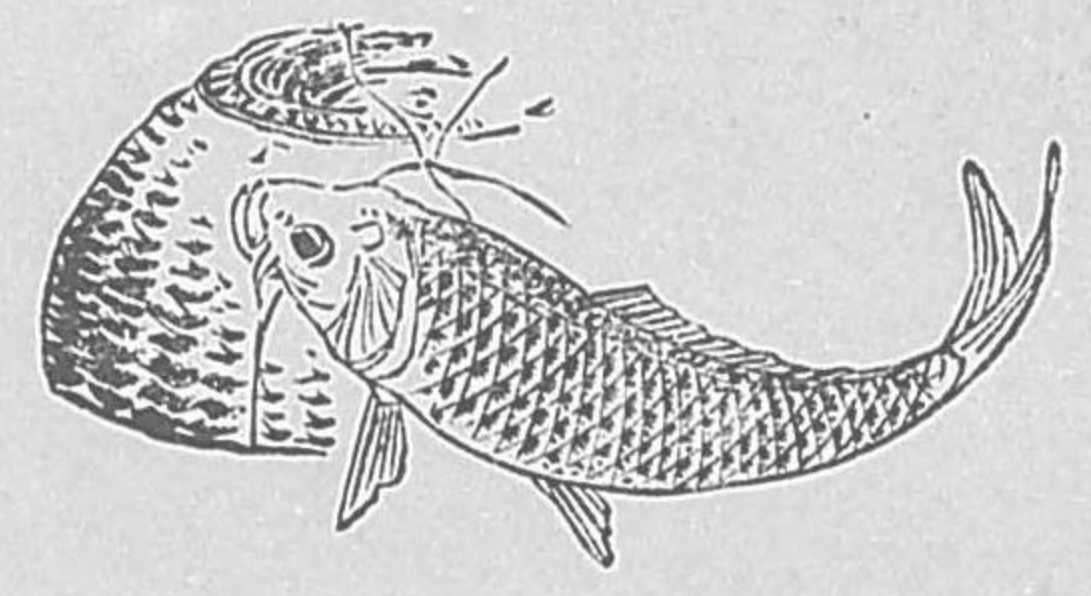
なり其朝霧漸々に晴

れてあたりの人家樹

木橋舟なども顯れ出

るけしき又無く面白

し



赤湯

大己貴命少名彥命
人の病を醫せんま
て出湯を作り給ひ
けん正和の頃この
赤湯の鑛泉世に聞

こゑ初めしより今
は一年に浴客三萬
人餘に及び村の賑
ひこなれりしも彼
神達の賜にこそ



286/47

明治卅五年三月五日印刷
(旅の家土産第四十二號)
明治卅五年三月十日發行
(非賣品)

發行兼印刷者
八木富次

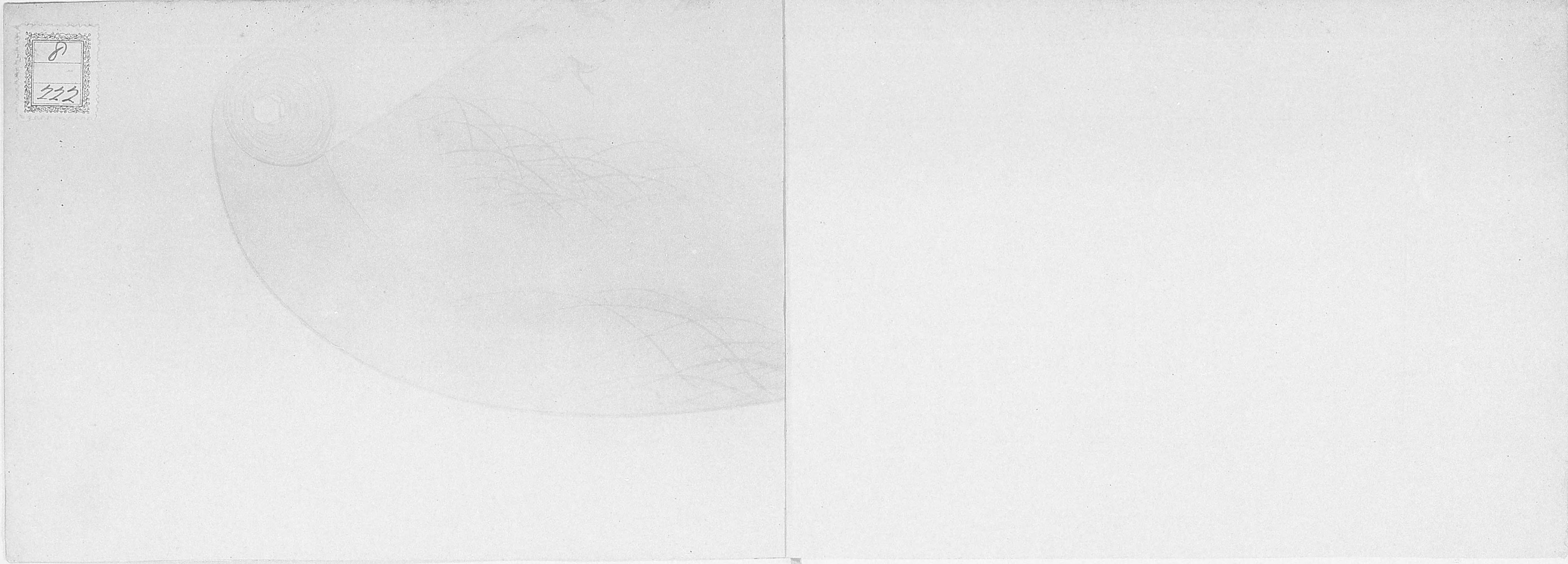
神戸市北長狭通五丁目四十六番地
光村利藻方寄留

發行所
光村寫眞部

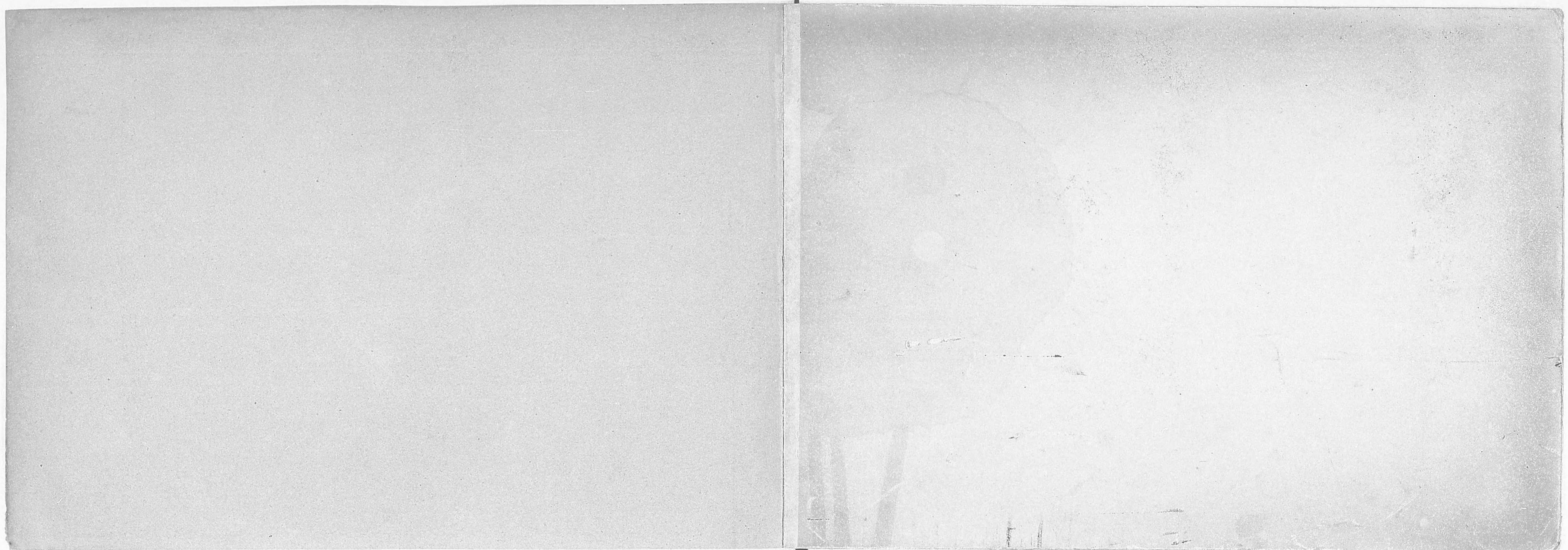
神戸市北長狭通五丁目四十六番地

印刷所
光村寫眞製版所

神戸市北長狭通五丁目四十六番地



8
112



8
222

終